

## フィールドワーク便り

### ベトナムでの海藻研究

—生態から採取・生産・利用へ拡がる関心—

筒 井 功\*

「今日は濁ってなにも見えないよ」

海からあがってきたばかりの若い男が、寒さで震えた声で言った。稚エビ潜水漁から帰ってきたのだ。それでも自分の目で確かめたくて、潜る準備をして海岸に降りてみた。やはりうねりが高い。11月がすぎて雨季にはいると、北東の季節風が強く吹きはじめ、静かだったニヤチャンの海は波が高くなる。濁りも強くなり、水温も下がりはじめる。これから数ヵ月間は潜水調査には厳しい時期だ。

筆者は1999年12月以来、ベトナム南部の漁業と観光の町ニヤチャンを拠点に、ベトナムの海藻類について、海の中の生態から陸の上の加工・利用までを追いかけている。

#### 研究への「想い」

熱帯の海の一般的なイメージとはどんなものだろうか。強い日差しのもとに広がる白いサンゴ砂の海岸、海にむかって傾きながら力強く伸びるヤシの木、エメラルドグリーンの海、沖のリーフに砕ける白い波、このような海岸の景色かもしれない。あるいは、さまざまな形をしたサンゴ類と、その間に群れる色

鮮やかな魚たちといった海中の景観かもしれない。しかしこれらはサンゴ礁という熱帯沿岸環境の一部でしかない。東南アジア大陸部沿岸の多くでは、河川の流れ込みが多くサンゴ礁があまり発達しないのが普通で、岩礁海岸には海藻類が生育していることが多い。

温帶の海において、海藻類の群落である藻場は、稚仔魚の保育場や海中環境の安定・水質浄化など生態的に重要な役割を果たし、また同時に漁場として沿岸漁業者の生活を支えている。いっぽう熱帯の海で同様の役割を果たしているものとして、サンゴ礁やマンガロープ林などが知られている。しかしながら熱帯の海藻類や藻場については、これまでほとんど注目されることがなかったため、その生態さえほとんど明らかにされていないのが現状である。熱帯の海藻類や藻場は、サンゴ類やマンガロープ類などと比べると、本当に注目するにも値しない存在なのだろうか、人々は海藻類を食べたり、漁場などとして利用したりさえもしないのだろうか。「もっと熱帯域の海藻類にスポットライトを当ててみたい」というのが、筆者の研究に対する「想い」である。

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

## 調 査

調査地にはベトナムを選んだ。数ある東南アジアの国々からこの国を選んだのには、3つの理由があった。1つめは大陸部沿岸の国々のうちベトナムに海藻類が比較的多く生育しているという理由である。2つめは海藻類の利用や生産に関する調査も含めて、海藻類関連の研究が比較的少なかったことである。これはベトナム国内の研究者による研究のみならず、海外の研究者との共同研究や外国人研究者の受入れが、タイやフィリピンなど他の東南アジア諸国と比べるとまだ少なかったことがあげられる。3つめは初めてベトナムに旅行に行って以来、なにかこの国に惹かれつづけるものがあったという個人的なものだ。

ベトナムに滞在し調査を始めるにあたって、心に決めたことがあった。それはできるだけベトナムの人々の視点からものごとを見ようということと、見聞きだけではなく体験を重視しようということである。ベトナムにおいて、「一般的ベトナム人」の生活はどのようなものかと規定するのはほとんど不可能だけれども、筆者の周りにいる同世代の友人らを参考にし、できるだけ彼らの衣・食・住の生活水準、また生活習慣などにあわせようと努めてきた。そのように生活していくうちに、次第にベトナムの人々の思考パターンや生活感覚など多くのことを、自分自身の実感覚として理解できるようになったと感じる。潜水調査の際も、漁業者と同じような姿で潜ることにできるだけ気を使ってきた。Tシャツと短パンで長時間潜っているのはいくら熱

帶の海といえども寒いし、足ヒレも使わずに水深5メートルまで潜って標本用の海藻類を探ってくるのもかなり重労働である。ウェットスーツに足ヒレを使い完全なスノーケリング姿で調査をすれば、植生や生態のデータを得るだけのためには楽で安全であろう。しかし、長時間海に入っている漁業者や海藻採取者の寒さを体感することはできない。ほとんど潜る人がいない北東季節風が強く波浪の高い時期だけ、安全面も考えてTシャツの下に薄手のウェットベストを身につけることにしている。

昨年の5月、ホンダワラ類を採取する家族と一緒に採取作業を手伝わせてもらったことがあった。筆者の「ヤワ」な手はすぐにふやけてボロボロになり、藻をぬきとるのにもかなり痛い思いをしたことがある。またホンダワラ類の採取は、暑い盛りに行われる所以、海面からの照返しもかなり強い。こんなことを毎日続けるのである。体力がなければやつていけないと実感した。

このように調査をつづけているが、日本では考えられないような理由で調査項目や方法などを変更しなければならないことが多い。洪水で橋が流されたり、雨水で道が冠水して調査定点に行けないこともあった。海岸道路の工事に伴ってでる余剰の土砂で調査定点が埋められてしまい、定点そのものが消滅してしまったこともある。ほとんど毎月のように通った調査定点の1つは、先月からリゾート開発のため立入禁止になり、もう調査することはできない。

このような外的なことだけではない。デ

シング熱にかかり月例調査に「穴」をあけたこともあった。今から振り返れば、さまざま面でベトナムにいるという緊張感がなくなってきた頃のことだったので、気がゆるみ始めていたのかもしれない。それ以降健康状態には気を使うようになった。朝起きたときの爽快感と夕方にビールを飲みたいと思うかどうか。朝夕の健康チェックが日課である。

このように、ことあるごとに調査の項目や計画の変更を余儀なくされている。けれども、こういったこともフィールドワークの持つ一面であろう。「ハプニング」を楽しむくらいの余裕を持ってかからないとかなりしんどい。「まあなんとかなるだろう」という、気楽な性格が幸いしていると思う。日本でたてた机上の調査計画や研究項目・内容がそのまま変更せずに実施でき、また終了できたとすれば、その計画はよほど優れた計画だったか、あるいは反対に元からまともにフィールドワークができるようなものでなかったかのどちらかなのかもしれない。いずれにしても、フィールドでは何事に対しても固執しては視野が狭くなると感じるし、また自分自身

の臨機応変さと頭の柔軟さが試されているような気がする。

### ベトナムの海藻

この2年間調査を続け、ベトナム沿岸、特に筆者が生態調査の定点としているニヤチャン周辺の海岸では、大規模なホンダワラ藻場が浅所に形成されていることがわかつてきた。筆者自身がこれまでに見てきたフィリピンやミクロネシア連邦のサンゴ礁域に生育するホンダワラ類というのは、長くなってしまいせいぜい60~70cmくらいのもので、群落としてもかなり規模の小さいものだった。しかしながら、ここでは長いものでは2mの長さにまで生長する種もある。藻体は3~4月頃に最も長くなり成熟するが、その後枝は急速に流れてしまい、6~10月には付着器と茎、わずかな葉だけの状態となる。沿岸住民によるホンダワラ採取は、藻体が最も長くなる3~4月に最盛期を迎える。この時期は北東季節風がおさまって海が静かになり、また水温も上昇する。さらにほとんど雨が降らない時期なので藻体を乾燥させるのにも適して



写真1 波あたりの強い場所に生育するホンダワラ属の一種 (*Sargassum* sp.)



写真2 緑藻・マガタマモ (*Boergesenia forbesii*)



写真3 褐藻・ウスバウミウチワ  
(*Padina australis*)



写真4 紅藻・フシクレノリ  
(*Gracilaria salicornia*)

いる。このような気象・海象条件とホンダワラ類の季節消長・分布特性があるため、安易にホンダワラ類が採取できるのである。このように採取されたホンダワラ類は、主にベトナム南部の町に運ばれ、清涼飲料や薬用茶、または肥料などの原料として使われる。特に、ホンダワラ類を使った有機肥料製造産業が近年急速に発展していることは注目に値する。ベトナムでも食品の安全性という観点から、化学肥料よりも有機肥料が見直される時期が始まろうとしているのかもしれない。これまでの売上の多くは南部地方であるが、今後高原野菜やコーヒーの産地がある中部地方の農家の人たちにホンダワラ類の有機肥料が受け入れられるならば、ホンダワラ類の肥料産業はかなり伸びてゆくのではないかと感じる。現在のところ、ベトナムにおけるホンダワラ類の需要はあまり多いとはいはず、筆者の潜水観察でも資源的には特に問題がないように思われた。ホンダワラ類を利用した清涼飲料や薬用茶の消費が、今後ベトナム国内で急増するとは考えられない。しかしな

がら、もし海藻肥料産業が拡大しホンダワラ類の需要が高まれば、ホンダワラ類の採取に関する規制がなにもなく、付着器ごと無造作に採取してしまうような現状では、すぐに資源が枯渇してしまうであろうことは、他の水産物の例からも簡単に想像することができる。このようなことは、生態の面だけを見ても、採取などの面だけでも、利用の面だけ調べてもはっきりとはわからない。さまざまな視点からホンダワラ類を調べておく必要性を感じている。

北東季節風が強く吹き、大きな波浪が岩礁



写真5 最盛期のホンダワラ類採取風景



写真 6 波しぶきの中、黙々とアマノリ類を採取する女性

にあたりはじめると、波しぶきがかかるような浅い場所にアマノリ類は生育をはじめる。味付け海苔や佃煮に使われる日本のアマノリ類とは種類が違うが、それぞれ同じような環境に同属の海藻類が生育するのは興味深いことだ。生育量は年によってかなり差があり、昨シーズンは生育量が多くかったが、今シーズンはかなり少なかった。アマノリを採っている人に聞いてみると、雨季の雨量が多いとアマノリの生育が多いのだそうだ。こういったことは、1~2年滞在し磯を歩いて調査しただけではなかなか得られない。長年アマノリ



写真 7 フーコック島ではキリンサイ類の海面養殖が本格化してきた

を採り続けている人だから知っている貴重な情報である。波浪が穏やかな時期に行われるホンダワラ類の採取とは対照的に、アマノリ採りには高波にさらわれる危険がいつもついてまわる。日本でもそうだが、ベトナムでも行方不明になってしまう人もいると聞いた。

ところでアイスクリームやヨーグルト、ソーセージなどの食品から液体塗料、化粧品まで、粘性が必要なさまざまな製品にカラゲナン（カラギーナン）という海藻由来の物質が使われている。その原料となるのはスギノリ科やミリン科などの海藻類で、キリンサイ属の *Kappaphycus alvarezii* もそのひとつである。カラゲナンの世界的需要拡大から、これまでフィリピンやインドネシアが中心であつたキリンサイ養殖は太平洋諸国やアフリカ、東南アジア地域など多くの国々に広がっている。ベトナムでは 1993 年に導入され、昨年ようやく本格的養殖事業が開始されるに至った。その間、水質浄化と海藻養殖の両面を目指したウシエビ養殖池での養殖など、世界で



写真 8 コンブ入り緑豆ぜんざい（コンブは中国から輸入されている）

あまり例をみないユニークな取組みが見られる。これまでのキリンサイ養殖の世界的な常識から考えると、ベトナムはさほど養殖適地が多いとはいえない。しかし上述のようにウシエビ養殖池でも、キリンサイ養殖が可能な技術ができあがれば、生産量はかなり増加するだろう。そのようなことを見越してかどうか、ここ数年、香港や上海など中国のカラゲナン製造企業数社が、先を争うようにベトナム側とのキリンサイ養殖技術の共同開発を申し出てくるようになった。中国系の人たちはやはり情報の入手が早く、また商売がうまい。

### 終わりに

2002年4月には、筆者は一貫制博士課程の5年になった。入学時には5年あれば何とかなるだろうと考えていたが、これまで意外と時間がかかってしまっている。まず自分自身でルートを拓き、紹介をうけた受入れ先でのお互いの信頼関係の構築と、ベトナムの環境になれることから始めなければならなかつたから、調査や研究ができるようになるのには、ベトナムに滞在を始めてからけっこう時間がたつてからのことであった。

早いもので、当初の滞在予定はもうすぐ

終わろうとしている。この2年間、ニヤチャンの海に潜り続けてきた。海のにおいや海水の肌へのまとわりつき具合で、川水が海に出たときの塩分低下がある程度わかるくらいに慣れてきたし、海中の海藻類のことは自分なりにある程度わかつてきたと感じる。その一方で「陸の調査」にあまり時間が使えなかつたのも事実である。最近までは「データがまだそろっていない」と焦ってばかりいて、残る滞在予定期間内でいかに効率よく「陸の調査」をこなすことができるかなどということに気が向いていたと思う。しかし慌てて効率を優先させた調査では、対象があまりにもシャープすぎて、表面的な事柄しかとらえられないということも、この2年間のベトナム滞在で得られた筆者なりの経験である。今、「陸の仕事」に集中できるよう少しのあいだ海から離れ、「海藻類の調査ができる海のない町」たとえばホンダワラ類の清涼飲料としての利用が多いメコンデルタの町やホーチミン市の華人街などに調査の重点を移さなければならない時がきた。まだ調査全体の終了までには時間はかかるだろうが、博士論文作成上の啓示やひらめきがあるまで、誠実にベトナムの海藻類やその地に住む人々と向き合つてゆこうと考えている。

## 一人前の土器職人への道

—エチオピア西南部アリ地域における土器作りのフィールドから—

金子守恵\*

「エイエー！エイエー！モリエーはブナ・アクシャが作れるようになったのか。さては、嫁に行く気だな！」

「エイエー！」というかけ声は、アリの人たちがとても驚いたときによく使う感嘆詞だ。ブナ・アクシャは、コーヒー（アリ語でブナ）を煎るのに用いる直径 50 cm ほどの円盤形をした土器のフライパン。いつも私の土器作りを冷やかしにやってくる近所のおじさんが、ブナ・アクシャを作っている私に向かって歌うように声をかける。

エチオピア西南部で定住的な農耕生活をおくっているアリの人たちのところに滞在しはじめて 1 年が過ぎようとしている。標高 1,500 m 前後の土地に暮らしている彼らは、エンセーテ（根茎を食用にするバショウ科作物）、タロ、ヤムなど 6 種類以上のイモ類と、モロコシ、オオムギなど 5 種類以上の穀類、そのほかにも豆類、野菜類と 10 種類以上におよぶ果物など多様な作物を栽培している。「1 日に 2 度 3 度と同じ料理を食べるのはよくない」という表現をしばしば口にする彼らは、主食だけを例にとってもさまざまな料理を作つて食べる。同じ素材でも、たとえばエンセーテを単純に蒸すだけでなく、他の素材と

一緒に蒸したモサと呼ばれる料理をしたり、エンセーテの葉軸の部分をしごき落としたものを発酵させパンにしたりと調理方法を変える。居候先に滞在中、続けて同じものを食べた記憶がほとんどない。

はじめてアリの地を訪れたとき、似たような形をした同じようなサイズの土器が、台所の壁や地面に所せましと置いてあるのを見て、てっきりそのいくつかは壊れていると思っていた。家の夫人に説明を求めるとき、土器はどれも壊れているわけではなく、それぞ



写真 1 蒸かしあがったエンセーテを竹べらでつぶしているところ  
底が丸く首のついた土器（ティラ）を使ってイモ類を調理する。壁には、食材・料理ごとに使い分けられている土器が吊されている。

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科



写真2 モサ（エンセーテ料理）

エンセーテの根茎部分の他に、ケールの葉、タマネギ、脂肪、ベニバナインゲン、塩などが入っている。中央には、キダチトマト、ニンニク、ショウガ、トウガラシ、香草、塩、香辛料がはいった薬味がある。これをつけながらモサを食べる。

これが日々の食事を作るときに必要であるといふ。土器以外にもアリの人たちは、木、竹、ヒヨウタン、石、粘土、イネ科の草本など地域内で入手できる素材から作ったさまざまな道具を使用している。その中で最も数が多くたのが土器であった。

Tさんの台所には18個の土器がある。そのうちティラと呼ばれる土器が11個あつた（写真1）。ティラはその下位分類名が用途に応じてつけられている。11個の内訳は、キャベツ料理用（エキナ・ティラ）、蒸留酒用、水瓶が各1つずつ、タロイモ料理用（ガビジャ・ティラ）が2つ、モサ料理用の大きいティラが1つ、小さいものが3つ、ブナカルーコーヒーの生葉を煮出して、塩、ニンニク、香草、香辛料をくわえた飲み物一を沸かす土器（ブン・ティラ）が2つであった。彼女によれば、モサ料理用の大きいティラを使うのは客が来た時のみで、通常は残り3つを順番に使う。こうすると土器が長持ちするし

料理がおいしくできるのだそうだ。2つあるブン・ティラは口の直径が異なる。大きい方のブン・ティラで沸かしたブナカルを、香草を入れておいた口の小さいブン・ティラに移して、それから小さなカップに注ぐ。彼女がこのようにして使い分けているティラは全部で9種類あり、その高さは15cm程度から大きなものでは40cm以上もあった。

今の時代に土器が生活のなかで活き活きと使われ、製作されているところとはいっていいどんな所なのか、素朴な疑問を抱く一方、こまやかに土器を使い分けるアリの人々のこだわりにも強く惹きつけられた。そして、土器を作りながらフィールドワークをするという生活をはじめた。

アリで土器を専門に作っているのはマナとよばれる職能集団の女性たちである。アリ地域には粘土を産出する場所が10カ所ほどあり、その周辺に土器作りの職人とその家族が集住している。1つの産地の周辺には25人から100人くらいの職人たちが村を作つて暮らしている。

土器作りの村に生まれた娘は、6才ころから母親のそばで土器の作り方を学び始める。彼女らが一番最初に作る土器は、ブン・ティラである。母親はまず、ブン・ティラを作るのに必要な量の粘土塊をつかみ取り、

「こうやって作りなさい」

といいながら、自分の手の動きを示すとすぐにその粘土塊を娘に手渡してしまう。娘は母親の手の動かし方を観察しながら、見よう見



**写真 3 粘土遊びをしている少女（中央）**  
マナの女性たちは、家事労働以外のほとんどの時間を土器作りに費やす。幼少の娘たちは土器を作る母親のそばで粘土遊びをしながら、土器の作り方を身につけていく。

まねで土器作りをはじめる。はじめて土器を作る娘に対して母親は、

「私の手と娘の手はちがうのよ」

といって彼女の土器作りに介入することはほとんどなく、手をとって教えることはない。娘ははじめから終わりまですべての製作過程をひとりで行うのである。

ブン・ティラを作ることができるようになると、次は同じ形でひとまわり大きなエキナ・ティラを作りはじめる。このようにして、娘たちは小さな土器から大きな土器へと徐々にその作り方を習得していく。土器を作りはじめて3年目になるイタヤタは、2000年9月の時点で、エキナ・ティラを作ることができたが、それより4~5cm大きいモサ・ティラをつくることはまだできなかった。

「お母さんにも、モサ・ティラを作れっていわれているの。作り方は知っているの。でもね、2つ作ったとしたら1つはこわれちゃうの」

その彼女も翌年の6月には、

「小さいモサ・ティラを作れるようになつたわ」

とうれしそうに報告してくれた。

娘たちは、作ることに加えて、定期市で土器を売ることもおぼえなければならない。市の立つの朝、母親に火入れをしてもらった土器をエンセーテの葉にくるんで、歩いて1時間ほど離れた市に背負っていく。穀類、野菜類、果物などの価格相場がほぼ一定なのに対して、土器は、鉄器、木工品、家畜などと同様に売り手と買い手の交渉によって値段が左右される。土器を売り買ひする交渉の場面はしばしば殺気立つ。職人たちは土器を買ってもらうために、売り手として低姿勢になることはほとんどなく、呼び込みなど全くしないで客が近づいて来て価格を尋ねたときにはじめて口をひらく。職人たちは一番小さなブン・ティラさえ1ブル（=約17円）以上の値をつける。1ブルあれば、エチオピア独特の発酵パン、インジェラが5枚買える。たいてい客はもっとまけさせようとし、職人はある程度までは譲歩して交渉を続けるものの、気に入らなければ客を追い返してしまう。イタヤタも、はじめはもじもじと下を向きながら交渉していたものの、むりやり40セントを渡して買っていこうとする客から土器を取り戻し「売らないわ！」と叫んでお金をつきかえした。

娘たちはエキナ・ティラが上手に作れるようになると、その次はナベやコーヒーポットのような形の違う土器を作り始める。私が作っていて冷やかされたアクシャという土器は、モサ・ティラや大きなガビジャ・ティ

ラが十分作れるようになってからでないとむずかしい。一人前の職人も修行中の娘もそのことはよくわかっている。このアクシャが壊れずに作れるようになり、酒造り用のマタージャ、ビルキ、インジェラを焼くバルシアクシャなど大型の土器を作ることができるようになると、そろそろ結婚話がもちあがる。

マナの男性にとって、良い土器を作ることができる女性は良い妻になるという。結婚を考え始めた青年たちは、各村の定期市を歩き回り、美しい土器を作れる未婚の女性をさがす。

結婚して7年、子どもが3人いるアドマソは、今の妻、アステラに出会うまで6年かかった。彼は、結婚を申し込んでからすぐに、最大円周が2mほどもある酒造り用の

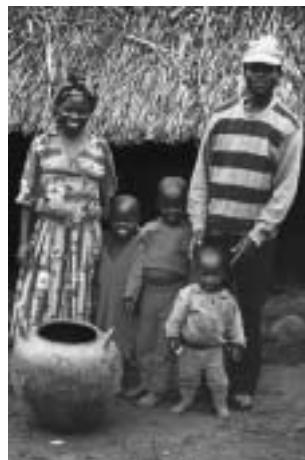


写真4 「この土器をみて結婚を決めました」アドマソ（右後）、妻アステラ（左）と彼らの3人の子供たち。この土器は、彼女が結婚する前に夫に頼まれて作り、彼はこれをみて結婚を決めたという記念すべきものである。現在もまだ壊れずに使っている。

大きな土器を作ることをアステラに頼み、彼女は1週間もしないうちにそれをつくってアドマソに贈ったという。

「人によってはね、水漏れしたりして1日ももたない土器があるんだ。でもね、アステラの土器はそんなことなかった。まだその土器は家にあるよ。丈夫な土器を作るとわかったから彼女と結婚したんだ」

こうして、ほとんどの職人たちは、自分が生まれ育った村を離れ夫が暮らす村へと婚出する。

妻となった職人たちは、夫の村の周辺で産出できる粘土で土器を作り、自分自身で火入れをしてマーケットに出荷しなければならない。また、売上のほとんどは生活費にあてられる。

G村のイジャケンは、夫と2人の娘の4人で暮らしている。2人の息子は去年と今年に結婚して近所に暮らしている。イジャケンは直径が1m以上もあるアクシャを毎日2枚



写真5 土器を作っているイジャケンと妻の作った土器を磨く夫

夫は、わずかな畑を耕作するほかは、ぶらぶらと村の中を歩き回ったり町にでかけたりする。時には、妻のそばで土器作りをながめるだけでなく、手伝う場面も見られる。

ずつ作る。夫は、約 30 アールの畑に自給用のトウモロコシを作付けし、その他に 5~10 アールのコーヒー畑を所有している。コーヒーは 2~3 年に 1 度の割合で約 200 kg(= 約 600 ブル) の収穫がある。イジャケンは、日々の暮らしに必要な生活費に加えて、息子 2 人の婚資や、夫や子どもたちが病気になったときの薬代など支出を一手に引き受けてきた。

「これまで、私が自分の手で土器を作つてなんとかして生きてきたの。父も姉も助けてくれなかつたわ。だってここにお嫁にきてから、私が土器を作つて自分の残りの婚資を父親に払つたのよ」

彼女の息子が結婚するのに必要だつた婚資について話をしていたときに、イジャケンはこういった。

「アクシャは、社会主义政権になってから急に値段があがつたから作るようになつたのよ。今もアクシャ以外の土器は作るわよ。アクシャはひびが入つて壊れやすいから。いろ

んな種類の土器を作つておいて焼成すればどれかは壊れず、最低でも塩は買うことができるでしょう。だから、いろんな種類の土器を作つてできるといふのは、いいことなのよ」

「それでモリエーはどこの村に嫁にいくんだ。ブナカルは沸かせるのか？インジェラは焼けるのか？」

さっきのおじさんはまだ、おもしろがつてその話を続けている。私は、今作つてあるアクシャにひびがはいりはじめ、それを直すのに懸命で、彼の相手をしている余裕はない。私の斜め後ろに座つて大きなアクシャをつくつていたイジャケンが、救いの手をさしのべるようにこういった。

「モリエーは、マタージャと、ビルキと、バルシアクシャと、全部の土器が作れるようになつてからお嫁にいくの。今はまだだめよ」

## チパンデが教育するもの

### — タンザニア・ゴゴ社会の割礼式 —

長谷川 竜 生\*

「とりあえず今日は、ウチの息子達を見てやつてくれ」

聞き取り調査にでかけた先の主人はうかれでいて、めんどうな質問は勘弁して欲しい様

子である。いさぎよく聞き取り調査はあきらめて、案内されるままについていくことにした。家人の住むホームステッドのすぐ脇に、収穫されたばかりの新しいソルガムの茎を束

\* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

ねて立てかけただけの、簡素な小屋が野営地に造られている。割礼を受けた少年達が、傷が癒えるまで寝起きする小屋だ。入る前からテンポの速い拍子木を打つ音や、かん高い笛の音が、にぎやかに聞こえてきた。

ここはタンザニア中央部ドドマ州のアカシア・サバンナが広がる半乾燥地、バントウ系農牧民のゴゴと呼ばれる人たちが住む、人口2,500人の村である。生業の基盤は農耕でありながら、かなり大規模に牧畜も営んでいる。この社会の少年たちは、およそ7歳から14歳までのあいだに集団で割礼式を受ける。彼らはその傷が癒えるまでの期間、ワニヤムルージ (*wanyamuluzi*) と呼ばれ、自分のホームステッドに入ることはおろか、母親を含めていっさいの女性と話すことが許されない。この期間中はずっとホームステッドの脇の小屋に隔離されて寝泊りし、おそろいの黒装束をまとい、完全に団体行動をとる。そして彼らは毎日、夕方から深夜にかけて拍子木を打ち鳴らしてチパンデ (*chipande*) を歌う。

私が野営地の小屋に入っていくと、昨日割礼の手術を受けたばかりのワニヤムルージ11人が、横一列に並んでチパンデを歌って

いるところだった。その周囲では1人の年配の男性が笛を吹いて、拍子木で打つリズムの調子をとっている。この男性の役目はもう1つあり、滑稽な動作と大げさな身振りで跳び回り、疲れてぼんやりしているワニヤムルージを見つけては、その前に立ちはだかり、顔を覗き込み、笛を鳴らし、地団太を踏み、肩を怒らせ、拍子木をひっぱたくパフォーマンスをして彼らを元気づける。また、ワニヤムルージにチパンデの歌詞を教えているのは、20歳前後の青年だ。彼が歌うチパンデの歌詞にならって、オウム返しにワニヤムルージが歌を暗誦する。こうしてワニヤムルージは約1カ月間、野営地の小屋で傷が癒えるのを待ちながら、さまざまなチパンデを教えられるのだ。本稿では、このチパンデの歌について紹介し、その意味について考えてみたい。

ゴゴの人々は多彩なタイプの音楽をもっている。ゴゴ社会に限らず、多くのアフリカ社会では、個人が自分の楽しみのために音楽を行うこともあるが、共同体内の集団による音楽活動では、特定の機会には特定の曲目が演じられる。そうした曲目のまとめは一般に1つの音楽類型を形成しており、固



写真1 少年たちが寝起きする野営地の小屋



写真2 チパンデを歌う少年達



写真 3 割礼式の期間中、全身に泥を塗る少年

有の名称をもつ [ンケティア 1992]。ゴゴ社会には、6月から9月に行われる少年の割礼式の期間中に野営地の小屋の周辺で、そこに参加する男性達が一緒になってワニヤムルージの「教育」のために行うチパンデ、そしてこの期間が終わる時に女性が1人でドラムを叩きながら踊るンゴマ (*ng'oma*) と呼ばれる音楽がある。割礼式と関係のない音楽でも、年上の青年達がタ方に娯楽のために行うムペンドー (*mpendoo*)、成人男女が飛び跳ねて踊る雨乞いの儀礼音楽であるムスニュンホ (*musunyunho*)、村内の作曲家が1年間の出来事から題材をとって創作する長大な叙事詩であるニンド (*nindo*) など、実に多彩な音楽活動がある。だからこそゴゴの人々にとって、よい歌い手であると賞賛されることは、非常に名誉なことなのだ。私はあるゴゴの青年に「君はあまり歌を歌わないね」と言ったばかりに、彼と彼の家系がいかに素晴らしい歌い手であるかということを、1時間以上も

懇々と説明されたことがある。

チパンデはワニヤムルージの「教育」のための音楽であるということだが、それにもしても、その具体的な教育内容が気になる。いつたいどのようなことがチパンデに歌われているのだろうか。私はなんとなく自分の身に置きかえて、中学生の頃、男子生徒だけを集めて行われた保健体育の授業などを回想し、想像を逞しくした。そして2日間その野営地に泊まりこんでチパンデの歌詞を記録することによって、「教育」の内容を調査してみることにした。

チパンデは1度始まると、ときにはおよそ4時間も続く。ただしそれぞれの曲はとても短い。単純なフレーズの曲をくりかえし延々と歌った後、間断なく次の曲に繋げて歌い続ける。それを録音して書き起こすことで、最終的に45曲のチパンデの曲目について歌詞を記録することができた。書き起こす作業をゴゴの人々に手伝って貰いながら、彼らに言外の意味を講釈してもらった。それぞれの曲が短いので、その主題は簡明だったが、中には彼らにも簡単には説明できない曲もあった。私はこれらの曲目を、大胆かつ恣意的な判断になることを承知のうえで、いくつかのカテゴリーに分類してみた。以下には、この分類にもとづきながら、チパンデの曲目の歌詞をいくつか紹介してみたいと思う。

歌は重要なコミュニケーションの手段であり、個人あるいは集団の経験を反映する創造的な言語表現の1つであるという認識をもつとしよう。すると歌の主題は、音楽に参加する人々にとって共通の関心を引き起こす事

柄に、おのずから集中する傾向をもつ [ンケティア 1992]。チパンデの場合、参加するワニヤムルージの最大の関心事は、まず間違いなく今、自分が参加している割礼式そのものであろう。そして実際に、記録したチパンデ 45 曲中の 14 曲 (31%) は、割礼式を主題にしたものであった。たとえば次に示すチパンデには、割礼の手術を行う割礼師マハンジレがやってきた時の描写から、手術をうける前の怖れが歌われている。そして手術を終えた今、ワニヤムルージはそのことを大声で歌うことによって、晴れがましい気持ちを実感するのだ。

マハンジレはブッシュに帰ったか  
拍子木をちからいっぽい叩け  
割礼師がウチに来た  
割礼師は言った  
母親達よ、連れて來い  
チビもノッポも残らずだ

ワニヤムルージは期間中、隙間風の入る粗末な小屋で寝起きし、長いあいだ母親とも離れて過ごさなくてはならない。そういう寂しい気持ちを、会えない母親に話しかけるという形式で、素直に表現するチパンデもある。

母さん、いつか必ずウチに帰ります  
母さん、いつか必ずウチに帰ります  
今晚は、朝日のような明るい満月  
もう 1 度、覚えた踊りのおさらいです

野営地では男達が、かかりきりでワニヤムルージの面倒をみている。食事から術後の衛生管理まで、かなりきめ細かな配慮をしていた。それでも今まで母親の庇護のもとにいた少年達には、いろいろ不便もあるのだろう。直接には話すことができない母親達に、空腹を訴えたり挨拶したりするために、定型化された歌詞をもつチパンデがある。次に示すチパンデを野営地にいるワニヤムルージが声を張り上げて歌うとき、ホームステッドの母親達は顔を見合わせ、主食の練り粥を用意し、大皿に山盛りにして運ばせる。

母さん、僕たちを忘れたの  
歌っても歌っても、聞いちやいない

一方で「教育」のための音楽であるチパンデらしく、17 曲 (38%) はゴゴの村で生活していくうえで必要な知識を主題にした曲目であった。身近にある作物の適性、薬草との効用、野生動物の見分け方と危険性、さらに少し変わったところでは鉄道のレールの上



写真 4 ヤギのスープを飲ませてもらう少年達

で遊ぶ危険性などの知識が主題となって歌われていた。次の歌詞は、ルググというソルガムの在来品種が、ほかの品種に比べて水持ちのよい氾濫原が栽培には適しており、ホウキモロコシのように垂れる穂形が特徴的であることを教えている。

ルググだよ、父さん、ルググ  
氾濫原にルググが穂を垂れているよ

また、タンザニア人として知っているべき歴史的知識を主題としている曲目もある。次の歌詞にててくるニエレレはタンザニアの初代大統領であり、セレナやルルは耐乾性が高く収量が多いソルガムの改良品種の名前である。

ニエレレが、ニエレレが  
セレナとルルを作ろう、と呼びかけた

村内の有名人物の知識も、村の生活には重要である。常に言動が注目されているような人物の個人名やあだ名を織り込んで、その行動をユーモラスに描写したり、コミカルに風刺したりする曲目もある。

行ってくるよ、  
畑の準備をする時期だけど  
ダルエスサラームで牢に入るのさ  
貶められたジョン・ヨムバラ

次には、人間関係の情景を主題にしたものが6曲（13%）あった。このなかには、父

と子、姉と弟、友達同士などの子供らしい人間関係を主題にしたものから、飢餓の際に親戚につれなくされたことを嘆くものや、家族が空腹でないか旅空のもとで心配する父親の気持ちをよみこんだものなど、かなり大人びた主題をもつものまでが含まれる。次の曲では、割礼の終わった少年が男らしさをみせるために、ンクワレ (*nkwale*) というイネの害鳥を退治する、と姉に宣言している情景を歌っている。

姉さん、弓矢を作ってくれ  
19匹のンクワレを退治する  
19匹のンクワレを退治する

そして何かに対して抗議することを主題にした曲目も4曲（9%）あった。抗議する内容には、分配された食物が少ないといった日常的かつ私的な怒りもあるが、政治が農民の生活の実態に無関心であることに対する公的な憤慨もあった。以下のチパンデは2000年の雨季にンコンベレレ (*nkombelile*) というキリギリス科の害虫が大発生し、作物に大きな被害をおよぼしたことについて言及している。ムカバは現大統領である。

見てくれ、ムカバ大統領  
ンコンベレレは  
すっかり穀物を食べつくした  
これで税金が払えるか  
これで寄付金が払えるか

問答の形を借りて謎かけを行うのは、ゴゴ

のンゴマ<sup>1)</sup> でしばしば好んで用いられる形式である。これがチパンデの曲目に取り込まれている例も3曲（7%）あった。

こんにちは、爺さん、ご機嫌いかが  
今日のごはんは何ですか  
私達は、キャッサバの練り粥  
ウシ持ちの旦那方は、コメの飯  
いろんな人がいますよね  
そういうものでしょ、爺さん  
そういうものでしょ、爺さん

ドドマ州で普及活動している教会や民間の援助団体は、ゴゴの人々の音楽が高い社会性をもつことをよく知っていた。そこで、植林を普及する団体は植林を主題に、医療関係の団体は衛生管理を主題にして、調査地周辺で村対抗の音楽コンクールを開催しており、優秀なものには賞金や賞品があたえられていた。こういったところで創られた曲も1曲（2%）チパンデに取り込まれている。

木を植えよう、木を植えよう  
開拓した土地に、木を植えよう

こうしてみるとチパンデによる「教育」には、確かに知識を主題にして、それを少年達に「教える」ことを目的としている、とみなしうるもののが多かった。しかし全体で

は、それ以外の主題をもつものが過半数（62%）を占めており、チパンデには一見まとまりのない主題の曲目が集まっているように見える。しかし視点を変えてみると、チパンデの曲目はいずれかの形で、ゴゴの成人が行う他の音楽類型を簡略化したものであるということが共通している。たとえば、歴史的知識を主題にしたチパンデは、長大なニンドの叙事詩のダイジェスト版のようである。またンゴマにおける問答の形の謎かけの形式も、チパンデに取り込まれていた。そして大人達が日々の人間関係のなかで、言いにくい自分の要求や意見を即興でつくる歌によって伝えるのと非常によく似たことが、チパンデでは割礼にともなう隔離期間をすごしている自分や、身近な人間関係、そこから生まれる抗議を主題にした曲目で行われている。そう解釈すると、チパンデは単に知識を与え定着させる教育として機能しているだけではなく、音楽によって媒介されるゴゴの大人の社会生活への入り口となっており、音楽を用いて複雑な人間関係に対処していくことへの第一歩を踏み出すように、ワニヤムルージに対してうながしているのではないかと思えるのである。

#### 引用文献

ンケティア、クワベナ。1992.『アフリカ音楽』龍村あや子訳、晶文社。

1) ここでいうンゴマ (*ngo'ma*) は、先述したものではなく、より広義の女性による歌と踊りを示す。